

第9回 3E フォーラム会議 聴講報告

筑波大学博士前期課程生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 嶋村江莉奈

2016年1月23日、つくば市役所にて第9回つくば3Eフォーラム会議が開催された。当日は悪天候にもかかわらず会場によりやく収まるほど多くの参加者があり、中には県外からやってきたという方もあった。参加者の構成は、受付で観察する限り一般市民から企業、研究機関など様々であった。

私は、3Eフォーラムを母体とする学生団体である3Ecafeプロジェクトチームに所属しており、それほど大きな規模ではないにしろ何度か専門家を呼んでのトークイベントの企画運営に携わったことがある。しかし、筑波大学でこれほどまで多くの人々がこのようなイベントに集まるところを見たことがない。「進路に関係しない限りわざわざ真面目な話を座って聞くために集まる人間はいない」という確信を持つほどには、参加学生を集めるのに苦労したものである。そのため、現在の3Ecafeプロジェクトチームは、トークイベントというより、環境問題にまつわる身近な問題を扱う不特定多数参加型の企画を打つようになっている。これが最近好評を博しており、学生の関心がどこにあるのかを理解する大切さを実感している。

今回の会議は新聞の広告欄を見てわざわざ来たという方がいたほどだから、「交通まちづくり」というテーマが人々のニーズに強く合致していたのだろう。事実、私がつくば市に住んでいて気になることも交通の便の悪さであったりドライバーの交通マナーであったり、何かしら交通に関連していることが多いから納得である。あるいは、自分のまちを良くしようということに積極的な層が単純に厚いのかもしれない。

会議の内容で印象的だったのは、「十勝や富山でできることがなぜつくば市ではできないのか？」という参加者の問いである。公共交通機関は自家用車によるCO₂削減の要だが、十勝ではバスの利用が増えており、富山にはライトレール・鉄道・バスを合わせた便利な仕組みが存在する。対して、つくば市はバスの利用者の減少とそれに伴うダイヤの減少、そして利便性が更に失われるためにまた利用者が減少するという負のスパイラルの真只中にある。

「他の事例のようになんとかできないか」と考える気持ちを理解することは容易い。ただし、パネルディスカッションでも指摘されていたが、交通というものはその地に固有のいくつもの条件で成り立つために、成功事例をそのままつくば市に適用することはできない。十勝では「バスの利用法がわからない」という原因を解消することで顧客の増加が実現した。富山のライトレールは、廃線になった私鉄のレールが残っていたことと、市長の多少強引な進め方が合わさってこそ実現したものと聞いた。つくば市にない条件は使うことができない。

それでも、つくば市が見習うことのできる共通点は確かにあると感じられた。それは、市民の本当に必要なものは何か、という問いに答えることである。必要がなければ見向きもしないのは、バスに限らずすべての物事に対し一貫して言えることである。地球環境を本当に第一に考える人間などいない。自分の生活が良くなることが第一で、「その結果」環境に良いことをしているなら良いというのが現実だ。ならば、これを目指して現在のバスのあり方をどう改善するのかを考えれば良いはずだ。バス政策の出発点を「利用者が少ない」から「バスを便利にする」に逆転するだけで見えてくるものがあるかもしれない。見失いがちだが、公共交通について、バス会社も環境都市つくばも、そして我々3Ecafeプロジェクトチームも、つくば市の人々が少しでも環境に配慮して生活できるようになるための手段であって目的ではないのだ。